

親を生涯発達の観点から捉える心理学的研究の試み

Parental development can be examined from
the viewpoint of life span developmental psychology.

林 昭 志

Hayashi Shoji

要 旨

本稿では、まず親の発達に関する従来の発達心理学的研究を概観した。次にエリクソンの生涯発達の観点から親の発達と子の発達の関係について述べた。さらにアンケート調査によって親の発達の様子を明らかにした。以上の結果、親の発達を示す「親性」は親が子どもだった頃からすでに発達しはじめており、親の発達は生涯発達の観点から捉えられることが示された。また子どもの誕生に伴う生活や生き方の変化により、親の人格の変化だけでなく、ものの見方や考え方に変化がみられることが示された。よって親への援助は親の人格的発達や認知的発達を促すものが必要である。

キーワード：親、子、親性、生涯発達、発達心理学、エリクソン

発達心理学とは保育士養成課程の中では「保育の対象の理解に関する科目」であり、これまでは子どもを理解するための科目として捉えられてきたことが多いようである。しかし最近では、少子化などを背景に子育て支援が叫ばれるようになり、保護者や家族への支援が重要性を増す時代になった。子育てが親にとって負担感が大きい時代になってきたといえよう。発達心理学においても子育て支援の立場での研究が求められる時代となったといえよう。

これまでに親に関する発達心理学としては、主として母性の研究、母親の役割など女性の養育・育児行動が研究されてきたようである。しかし男女共同参画社会の実現が目指されている現在では、男性の育児への参加が求められており、父親を含めた親の理解が必要になってきた。これまでの発達心理学の研究の中で親の発達心理学の研究として、次のような研究が挙げられる。

柏木（1993）は「このような生涯発達の視点に立って、家族生活のなかでの成人期以降の人格的社会的発達を扱った研究は日本ではまだきわめて少なく、欧米でも緒についたばかりである。（p. 129）」としている。

柏木・若松(1994)は、親となることによって人間的な面で発達した領域として、「柔軟さ」、「自己抑制」、「運命・信仰・伝統の受容」、「視野の広がり」、「生きがい・存在感」、「自己の強さ」の6つを挙げている。こうした発達はオールポート (Allport, G. W.) が人格の成熟として挙げているものにも該当するという。しかもこうした発達の变化は母親のほうが父親より大きいという結果であった。さらに、とくに専業主婦の母親においてこうした発達の变化が著しいという結果であった。これについては「育児のほか、大きな比重を占めている職業生活においてもさまざまな経験をしており、その中で人格的に鍛えられ変化している可能性が十分考えられる。(p. 77)」としている。

戸田(1996)は、これまでの発達心理学での親の位置づけを検討し、親は説明変数(独立変数)として子どもに一方的に影響を与える要因として扱われてきた点、親と子どもが相互に影響を与え合うなかで親の態度や行動が形成されるという観点が乏しい点、などの問題点を指摘している。また、「『親としての発達』のプロセス、あるいはその個人差についてはほとんど述べられていない。」としている。また「親になったことで人間はどう変わるのかについては、日本ではまだ記述が始まったばかりである。」としている。

大野(1998)は「父親に固有の役割は何か、母親の役割とされてきたものは本当に父親による代替は不可能なのか、という問題を検討し(中略)、これまで生物学的な性差によると思われてきた父母の違いの一部は、実は個人差で説明できること、したがって一般に子どもに対する母親の役割と思われる事柄のなかには、父親が代わって行うことが可能なものがあることがわかってきた。そうした研究成果を踏まえて、『父性』『母性』という言葉は、性別に関係ない『親性』という用語に置き換えられている。(p. 178)」と記している。さらに「『親性』はさらに、養育される子どもと養育者の関係を親と子に限定しない『養護性』(Fogel ら, 1986)や『次世代育成能力』(原・館, 1991)といった概念へと発展している。(p. 178)」としている。

この点で、小嶋(1989)は、大人がすでにもっている養護性は、子ども時代からの長い経験を通して形成されてきたものであり、幼児や児童であってもすでに養護性といってよいものをもっているとしている。また、たとえば親が子どもだったころに自分の親にどのように育てられたのか、また幼い子どもと接触した経験がどれほどあるのか、という点が養護性を形成したのではないかと示唆している。小嶋(1989)は、「幼いもの、あるいは一時的にでもその有能性を失っている存在に対して、その発達を直接・間接に支え促す方向に働く構えと技能に焦点を当てたのが養護性という概念(p. 192)」だとして、「慈しみ育てよう」という視点が養護性の概念だとしている。

さらに、大野(1998)は、父親研究の課題と展望について、「心理学における父親研究の歴史は浅い。(中略)その後、父親研究がさかんに行われた。それまで親といえば母親一辺倒だった心理学研究の世界で、父親の存在がにわかに脚光を浴びるようになった。いわゆる『父親の再発見』である。日本の父親研究はアメリカよりさらに遅れていて、父親に関連する実証的研究やすぐれた文献があらわれたのは、ようやくここ10数年のことである。(p. 181)」としている。さらに「父親についての研究は、これまで自明のこととされてきた子育てにおける母親

の優位性に疑問を投げかけることになった。その結果、子どもの養育にかかわる親の役割についての知見は、『生物学的な性 sex』と『社会的に学習された性 gender』を明確に区別した上での問い直しを迫られている。(p. 181～182)」としている。

谷向(2003)は、親になる発達過程について、親性の発達を論じる中で、「親になることは人に大きな変化をもたらす。だれもが親になったときは初心者で未熟だが、子どもを育てる経験を通して徐々に親らしさを身につけていくものである。しかし、親性の発達は親になって始まるものではない。親になる前から、さらに子どもが一人前になった後も続く。人間は発生から死に至るまで発達し続けるというのが生涯発達の考え方であるが、親性の発達も生涯にわたり続くものなのである。(p. 210)」としている。このように親性の発達は生涯発達の中に位置づけられるものである。しかも、親として必要な能力や態度などの「親準備性」は幼少期から形成されており、親性の発達は幼少期からすでに始まり、親となった後は生涯にわたり続いていくものである。

ここまでの先行文献をみてきたように、たしかに現在では父親だけでも子どもを育てることが可能となってきているので、父親と母親は子育てにおいては対等な立場で子育ての方針について話し合い、平等に育児を分担することができるし、そうすることが必要なのである。したがってこれまで母親研究に偏重してきた発達心理学を父親研究に広げることが必要である。

さらにまた最近では「子育ての社会化」などといわれることがあるように、父親でも母親でもない人々が子育てを支援していくことが求められているので、「養護性」「次世代育成能力」という概念の研究が必要である。たしかに「保母」が「保育士」という名称へ変わったことからいえるように、保育というものは女性だけの職業ではないという認識が広がってきている。「養護性」などこれら概念は子育てに関わる人々が身に付けるべきものであり、「養護性」などが発達していけば保育がよりよいものになる。しかし現状では子どもを養育する義務と親権のあるのは、主として親であり、親になった人々は「親性」を高めることが求められている。

ところが「親性」「養護性」などの発達は一朝一夕に達成されるものではない。子育て支援、家族援助が叫ばれるようになった現在、保育の対象として子どもだけでなく親を支援の対象として考えるようになったのは当然であるが、親としての準備は幼少期の慈しむ体験などから育っていくものであるとすれば、親の支援は本当は、親になるずっと以前の幼児期から始めていかなければならないのである。しかも親は生涯にわたって「親性」を発達させるものだとすれば、親の生涯にわたって親への支援が必要となっている。現在、保健センターや産院の両親学級をはじめ、多くの子育て支援事業などでも「親準備性」や「親性」が養われているし、メディアも多くの育児・教育の情報を伝えて、「親準備性」や「親性」の発達に役立っている。しかし、親としての発達の準備はすでに幼少期から始まってしまっていて、親としての個人差が大きいことが考えられるし、生涯にわたって系統的に「親性」を発達させていく機会が少ない。そもそも親たちが日々の子育てに必要なとしている援助とは、親として子どもとともに発達するためのものではないだろうかと考える。子どもの発達の知識を得たり、不安を除いたり、一時的な休養をとったり、経済的支援を受けることはたしかに重要で不可欠な子育て支援である。

しかし、日々発達し続けていく子どもたちと同様に親たちも人格的にも認知的にも発達していくという課題が残されている。子育てをはじめたばかりの親たちははじめから親として完成しているわけではない。親は子育てをしながら子どもとともに発達していく。親は子育てしながら何度も困難を乗り越えていかなければならない。そのためには親は精神面で成長することが必要だし、ものの見方や考え方が柔軟になったり、広い視野から物事を捉えたりすることが必要であり、ときには多くの視点を統合して物事を考えられようになることが必要である。このように親は「親性」の発達や、親としての発達を必要としている。しかし、これらを発達させるためには生涯にわたる長い時間が必要であるし、系統的で意識的な発達支援が必要である。

この点に関して、エリクソン (Erikson, E. H.) の発達段階理論によれば、親の人格的発達はどのように描けるだろうか。エリクソンでは第5段階 (青年期) はアイデンティティ獲得対拡散、第6段階 (成人前期) は親密性獲得対孤独感、第7段階 (成人後期) は生産性 (世代性・生殖性) 獲得対停滞感、第8段階 (高齢期) は統合感獲得対絶望感、となっている。エリクソンの言う生産性 (世代性・生殖性) とは、次世代を担う子どもを世話し育てていくことを意味し、子育てに関係が深い。しかし親としての発達は生涯にわたるものである。したがって親としての人格的発達は、各時期の心理社会的危機を乗り越えて、アイデンティティ、親密性、生産性、統合感のそれぞれの獲得が発達課題となっていることを示す。エリクソンの理論によれば、その段階の課題は生涯にわたってあらわれてくるというものである。子育ては子どもの成長に伴って愛情や世話を子どもに与えていくことだから、親のものの考え方や人格は子どもの発達とともに発達・成熟していくことが必要である。親が生涯にわたって親として発達していくかどうかは親子関係や子どもの発達を左右するのである。また育児の負担を男女で分け合って平等にするという発想でなく、子育てによって男性が人間的に発達できるという捉え方をすれば、子育ては貴重な体験のひとつであり、自分を成長させて、人生を豊かにする方法のひとつだと気づくこととなる。しかし現代の子育て事情は親たちに重い負担感を与えるものとなっている。

子どもがエリクソンの心理社会的危機を乗り越えて発達課題をこなしていく過程において、親もまた発達していくのである。すなわち親の発達は子どもの発達と深い関係がある。これをもとにして、子育てを子どもの発達と親の発達の絡み合いという観点から、次のようにまとめることができる。

<子育ての発達段階～子どもの発達と親の発達の関係>

子ども誕生以前の時期

妊娠期の親は障害にたいする不安があり、なによりも健康な子が誕生することを願っている。誕生以前の時期はすでに親にとっては、両親学級へ参加したり、育児用品を準備したりと、子育ての準備をする時期である。親密性の獲得の課題を達成した親は、次に生産性の獲得が課題となるが、この生産性の課題は子育て期すべてを通して達成されるものである。この段階ですでに親性の個人差がある。

第1期 子どもが乳児期まで

子どもは基本的信頼感の獲得が発達課題であり、親は愛情を注ぎつつ、子どもに対し生命・安全に配慮する必要がある。はじめて子どもが誕生した親はこれまでは自分のものだった時間を子どもにまわす必要があり、子育てが予想以上に大変であることに気づく。夫婦が家事の分担について了解しあうことが必要である。

第2期 子どもが幼児期になる

この段階では子どもは第1反抗期になる。しつけを始める時期である。また第2子としてきょうだいも誕生することも多い。子どもは自律性や自発性の獲得が課題となり、この獲得に失敗すれば、恥、疑惑、罪悪感を自分を感じるようになる。子どもの自我が芽生える時期であり、親はこれまでの子どもに対する対応や見方を変えなければならなくなる。きょうだいも誕生すれば、これまでの3者関係から4者関係へと家族関係が大きく変わる。子どもはこれまでと違い、活発な移動、活発なコミュニケーションが可能となる反面、親にとっては子育ての負担が大きくなる。

第3期 子どもが児童期になる

身辺的な自立が完成し、学校へ通うようになり、学習が始まる。子どもは勤勉性の獲得が発達課題であるが、この獲得に失敗すれば劣等感を自分を感じるようになる。親は子どもの学習状況に気をかける。

第4期 子どもが青年期になる

子どもは親から精神的な独立を試みるようになり、第2反抗期を示す。子どもはアイデンティティや親密性の獲得が課題となり、親よりも友人を心の拠り所とすることが多くなる。子どもと親の価値観が対立することもみられるようになる。子どもは心理面での世話を必要とする。親としては再び子どもが言うことをきかなくなる時期を迎え、子どもに対する見方を変えざるをえない段階となる。子どもの親からの心理的離乳とともに、親にとっては「子離れ」が課題となる。

第5期 子どもが成人期になる

子どもは親から経済的にも独立し、居住が分かれることもある。子どもは親密性や生産性の獲得が課題となる。親は高齢期に入り、統合性の獲得が発達課題となる。親は自分たちの人生の意義を見出すことが課題になる。子どもは親世代とは異なる価値観を持ったり、家族を持つようになったりする。親は子どもと対等になり、子どもの独立した人格を尊重する。また子育てに関しては、親の援助が子ども世代の子育てを容易にする。

このように親の発達の過程は子どもの発達の過程と深く関わっている。しかも子どもの反抗期や自立の時期には、しつけや教育や関係づくりが困難になることもあり、親としての生涯発達の中で心理的危機が何度もある。それは子育てについての危機であり、同時に親の発達援助が必要な心理的危機だということである。つまり子どもの発達の転換期において親の発達の転換期があるということである。その際には、親は子どもの考え方や子どもの変化を理解する

ために、これまで親が持っていた子どもの見方の枠組みを変える必要がある。よって親への援助は親の人格的な側面や認知的な側面の発達を促すようなものが必要である。

このように子育てにおいては、子どもの発達を援助する親自身が人格的・認知的に生涯を通して発達することが求められており、子どもと親の発達のイメージを次のように図示できる。上の矢印は親の発達を示し、下の矢印は子どもの発達を示す。左側は子どもだけが発達するイメージを示し、親が発達するという観点が無い。右側は親が子どもとともに発達するイメージを示す。子育てしながら親と子どもが発達していくイメージは右側である。もちろん親の能力は子どもにいつか追い抜かれることも考えられるが、それは子どもが大人になるようなもっと後の時期からである。

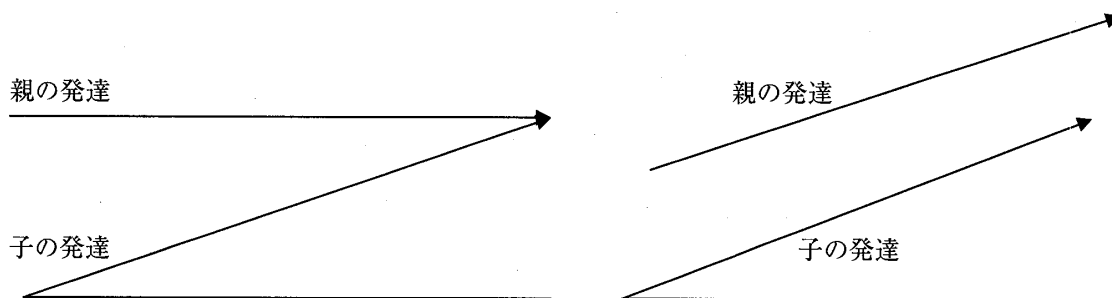


図1 子の発達と親の発達

きょうだいが生まれると親の発達の過程はより複雑になる。たとえば親としての子育ての技能が熟達するのは、経験によるところが大きい。熟達化したときには子どもはすでに次の発達段階の課題に取り組んでいる。したがって親の技能が役立つのは下の子ども（きょうだい）を育てるときになるが、きょうだいが生れると、親はきょうだい関係の問題に取り組まなければならない。こうして親は子どもの早い成長に伴い、次々と子どもの新たな課題に取り組む技能が必要とされるようになる。

調 査

本研究では、子育ての実態、親の意識、親としての発達、などを明らかにする目的で、子育てに関する自由記述形式のアンケート調査を行った。

1) 方法

調査協力者は6歳以下の子どもを持つ夫婦、父親と母親のペア（10ペア20名）である。子どもの人数は1人が7ペア（1歳以上～2歳未満が6ペア、6ヶ月未満が1ペア）。また子どもの人数は2人が3ペア（6ヶ月以上～1歳未満と3歳以上～4歳未満が1ペア、1歳以上～2歳未満と4歳以上～5歳未満が1ペア、6ヶ月未満と4歳以上～5歳未満が1ペア。ただし父親の回答がなかったものがある。）。

質問項目は、子育ての実態、親の意識、親としての発達、親の求める援助などに関するものを作成した。その際、柏木・若松（1994）などの先行研究を参考にした。

2) 結果と考察

得られた回答を要約し、父親と母親別、子どもの人数別にして分析した。なお調査協力者によっては無回答だった質問項目がある。

子育ての実態について

予想と実際の子育ての違いについては、「ない」という回答もいくつかあったものの、苦労や大変さなど実際の子育てが予想以上に大変であることを挙げた親がかなり多かった。特に母親の方が父親よりも回答がバラエティに富んでおり、実際に子育てをしていると思われる母親の苦労が伺えた。この点では、子育てが親にとって負担感の強いものとなっていると言われている通りであった。また母親と父親の愛情の違いに関しては「ない」という回答と「ある」という回答に分かれた。回答の仕方は、違いがあるとすれば、「父親は子どもがおなかにいた体験がない」という点だというものであった。また子どもの人数については大きな差はみられなかった。ただし子どもの人数が1人の場合は子育てについての不安を訴える回答が目立ったのに対し、子どもの人数が2人の場合は、大変さと楽しさの2つの両極に分かれる回答がみられた。

親の発達について

親と親でない人との違いをどのように認識しているかという質問では、親には子どもがいるために生活の仕方が親でない人とは違っている、という内容の回答が多かった。つまり親になることによって、自分中心の生活から子ども中心の生活へと大きく変化する。さらに親は自分の生活スタイルが変化すると同時に、ものの見方をも変化させていくことが明らかになった。たとえば子どもへの見方が変わったり、考え方が柔軟になっていくようであった。また親になって人間的・人格的に成長したか、という質問に対しては、忍耐力や責任感が増した、という回答（父）や、思いやりが増した、周囲のことを考えるようになった、自分中心に考えないようになった、という回答（母）があった。たしかに子育てには苦労や心配が絶えないので、子育てには忍耐力や責任感が必要である。また周囲のことが考えられるようになるなど、ものの見方や考え方についての発達が示された。こうした親の発達を示唆する点は先行研究と一致する。また、考え方やものの見方の変化についての質問では、子どものことをまず考えるようになった、子どもを中心に考えるようになった、という回答が多かった。しかし、一方で家族、自分、お金に関する見方の変化についての回答も多く、親になることによる考え方の変化については多様な回答を得た。

親の求める援助に関して

親が学びたいこととしては、子どもの病気についての知識や子どもとの遊び方などの技能が挙げられた。しかし個性を大切に教育など、子ども観や人間観を問うような学びも挙げられており、親として発達する課題は大きいことが示唆された。また子育て環境については、行政や職場の改善に関するものが多かった。回答の仕方は様々であるが、“子どものあそび場の充実”と“親が子どもと触れ合う時間の拡大”の2点にまとめられる。あそびに必

要な3要素として、時間・空間・仲間の3つの間を挙げることもあるが、こうした基本的な要素を子育て環境に求めているようである。最後に親が子どもをどう育てたいかにかかわる質問では、「素直」や「思いやり」などやさしく健全な心を持つ子という回答が大変多かった。

以上のように、母親にとっても父親にとっても子育ては負担が大きいことが明らかになり、親となったことによって人格的にも認知的にも発達していく可能性が示唆された。もちろんこのように示された親の発達が子育てによって形成されたものか、キャリアの中で形成されたものかどうかを明らかにする必要性が残っている。親には「親性」「養護性」「次世代育成能力」といった発達課題と、柔軟な思考や責任感などの人格的・認知的な発達課題がある。親の発達には個人差があり、子育ての途上で心理的な危機に出会うこともあると考えられ、その際の援助が大切になっている。親のものの見方を変化させたり、人格的発達を促したりする援助が親にとって必要であると考えられる。

文献

- 柏木恵子(1993) 父親の発達心理学 川島書店
- 柏木恵子・若松素子(1994) 「親となる」ことによる人格発達 発達心理学研究, 5, 1, 72-83.
- 柏木恵子(1995) 親の発達心理学 岩波書店
- 戸田まり(1996) 発達心理学における成人期(1) —親はどう捉えられてきたか— 北海道教育大学紀要(第1部C), 46, 2, 41-52.
- 大野祥子(1998) 父親であること 柏木恵子(編著)結婚・家族の心理学 第4章 ミネルヴァ書房
- 小嶋秀夫(1989) 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫(編著)乳幼児の社会的世界 第9章 有斐閣選書
- 谷向みつえ(2003) 親性の発達と親になる過程 小林芳郎(監修)子どもと保育の心理学 第10章 保育出版社
- エリクソン, E. H. 仁科弥生(訳)(1977) 幼児期と社会 I みすず書房
- Fogel, A., & Melson, G. F. (eds.)(1986) Origins of nurturance. L. E. A.
- 原ひろ子・館かおる(編)(1991) 母性から次世代育成能力へ 新曜社